

氏名（本籍）	エ 衛	トウ 藤	ヤス 泰	コ 子	（東京都）
学位の種類	博士（音楽学）				
学位記番号	博音第102号				
学位授与年月日	平成19年3月26日				
学位論文等題目	〈論文〉ヘンデルの創作活動とアッココンパニヤート				
論文等審査委員					
（論文審査主査）	東京芸術大学	教授	（音楽学部）	土田	英三郎
（論文副査）	〃	〃	（〃）	船山	隆
（〃）	〃	〃	（〃）	片山	千佳子
（〃）	〃	助教授	（〃）	大角	欣矢

（論文内容の要旨）

本論文は、ヘンデルの劇作品をほぼ二分するオペラとオラトリオのすべてのレチタティーヴォ・アッココンパニヤートを様々な観点から分析して、次の3点を解明することを目的としている。

- (1) ヘンデルの個別の作品におけるアッココンパニヤートの役割
- (2) ヘンデルのアッココンパニヤートの創作に関する、オペラとオラトリオ間の相違
- (3) ヘンデルの50年間に及ぶ劇作品創作活動における、アッココンパニヤート創作の年代的变化

ヘンデルのオペラとオラトリオに関しては、これまで、アリアやアッココンパニヤート、アリオソ等の各形式について、個別的な曲の分析はなされているものの、未だ包括的な研究は行われていない。筆者は、アッココンパニヤートが作劇上重要な役割を果たしていると考え、アッココンパニヤートを含むヘンデルの劇作品—オペラは36作品104曲、オラトリオは31作品139曲—の音楽と歌詞を対象に、「質」と「量」の両面から総合的な分析を行った。

まず、質的分析としては、アッココンパニヤート各曲について、個別に、音楽と歌詞との関係、ドラマ全体と当該アッココンパニヤートとの関係を分析した。本論文では、代表例として、オペラの《タメルラーノ》と《オルランド》、オラトリオの《セメレ》と《ヘラクレス》を提示している。次に、量的分析としては、1曲ごとに、歌詞内容や使用場面等に関する作劇分析や、筆者自身が設定した5種類の音型（A：アクセント型、B：保続和音伴奏型、C：旋律伴奏型、D：旋律伴奏型&保続和音伴奏型、E：旋律伴奏型）への分類による旋律タイプの分析、小節数や全曲中での配置等について作曲技法の分析を行い、その結果を数量的に集計することにより、アッココンパニヤート創作全体の傾向を明らかにした。以上の分析結果から、冒頭の3点について、次のような解答が得られた。

(1)については、①喜びの場面に使われる例はごく稀であること、②ドラマの展開上重要な場で使われていること、③規模が突出したアッココンパニヤートは、悲しみや苦しみが極限に達した場面で書かれていること、という従前から指摘・示唆されていた見解が実証されたほか、次のとおり、未だ言及されていない2つの点が明らかとなった。

① 「悪役」や「敵役」には滅多にアッココンパニヤートが与えられていないことから、アッココンパニヤートの役割には、単にドラマを盛り上げるのみでなく、聴き手をドラマに引き込み、主役の心情に同化させることも含まれていること。

② 大半は心情表現のために使用されるが、演出効果を高めるため使用される場合も決して少なくないこと。

(2)については、①オラトリオの多くは旧約聖書の内容を題材とするため、神と関連する場で使用され

る例がオペラより数多く見られたこと、②演出効果の面では、オペラでは「神秘」「魔法」「冥界」等の非日常的場面に用いられることが多いのに対し、オラトリオでは「登場人物の性格づけ」や作品最初の曲として用いられることが多いこと、更に特に注目すべき点として、③最も多く使用されるのが、オペラでは心情表現のためであるのに対し、オラトリオでは演出効果のためであること、が明らかとなった。

(3)については、オペラでは、《ジュリオ・チェーザレ》や《タメルラーノ》を含む1724年から27年までの3年間の作品と、1733年の《オルランド》において、多数、大規模、多様な音型のアッコムパニヤートが書かれており、この2つの時期をピークとする軌跡が見られた。一方、オラトリオでも、《セメレ》《ヨセフとその兄弟》《ヘラクレス》《バルシャザール》という1744年から45年間の4作品と、1752年のヘンデル最後のオラトリオ《エフタ》において、数・規模・音型の多様性において充実した曲が書かれており、オペラと同様、2つの時期をピークとする軌跡が見られたのである。

なお、以上の分析結果を通じて、ヘンデルのアッコムパニヤート創作とヘンデル作品の興行的な成果の間に強い関連があることが窺われた。この関連性の実証は今後の課題であるが、ヘンデルの創作活動全体について再考を促す可能性を孕むものと考えている。